

ゴボーを持ちながら

英 衿子

登場人物

女1

女2

少年

プロローグ

ゴボウが一本置いてある。

白い服の女1、本を持ってやってくる。

本を開いて、読み始める。

待つ、ということ。

待つ。待つ。待つ。待つ。・・・

待つのは、楽しい。

待つのは、悲しい。

待つのは、つまらない。

待つのは、面白い。

待つ。待つ。待つ。待つ。・・・

気づいたら、何かを待っていた。人は生まれると同時に、何かを待つのだ。それが「死」であるならば、生まれる前の命は、「生」を待っているわけで、それなら私も、死んだら次は「生」を待つことになるのか。ぐるぐる、ぐるぐる、死と、生とを待ち続けるのか。

私は女である。女は、命を生む。女は、命に待たれている。女は、待たなければならない。しかし女もまた命である。女には、待たなければならないときもある。

待つ。待つ。待つ。待つ。・・・

待つことは、祈ることだ。

あなたが来るのを、願うことだ。

待つことは、生きることだ。

生きることが喜びならば、私は待つのが好きなのだろう。

私は今も、待っている。

あなたと約束したあの日から、あなたに言ってもらえる日を待っている。もう、いいよ、と。君は、それでよいのだと。言ってもらえる日を待っている。

こうして日々を過ごしていれば、私は毎日とても楽しい。ふとした瞬間に、そうか、私は待っているのだ、と。きつとやってくるあなたを、待っている、そのことが私を強くする。私の毎日をきらきらとさせる。

もしもあなたが来なくても、泣くことはない。あなたを待つて過ごした日々が、私の命に光をくれたのだから。あなたは知っているだろうか。私がこんなにも、あなたを待っていることを。

あなたは、待っていますか。誰を、待っていますか。私を待つてくれていますか。

私は今も、待っている。
あなたと約束したあの日から、あなたに言ってもらえる日を待っている。もう、いいよ、と。君は、それでよいのだと。言ってもらえる日を待っている。

女1が本を読んでいる間に、白い服の女2、大きい洗濯かごに衣装を入れて持ったまま登場。身体に洗濯用のロープが巻きついている。外そうとするが取れない。

女1 (女2に気づく)

女2 取ってー！

女2 手伝ってー！

女1、手伝って、ロープをとる。

女2、解放の喜びで跳ね回る。

女2 やったああああ！

女1、洗濯カゴの中身を出す。色とりどりの服があたりに散らばる。

女2 何着よう！

音楽。2人、衣装を着始める。生まれたての子供が、初めて服というものを着ることを発見したようである。見せ合ったり、アドバイスしたり、取り合いになったり、やりあいっこしたり。ダンスチックに。オシヤレが完了する。

女2 ところで、何するんだっけ。

女1 待つもの。

女2 え、待つもの。

女1 うん。

女2 待ってるだけ。

女1 うん。

女2 何して待つもの。

女1、少し考えてから、洗濯カゴの中に残っていた洗濯物を発見する。取り出す。タイトル「を持ちながら」。女2、そばにあったゴボウを手に取り、女2に渡す。

『ゴボーを持ちながら』

その1

「ゴボウを巡って攻防」編

浜辺のような場所。ベンチが置いてある。

その上に、ゴボウが一本置いてある。

女1と女2、遠巻きから近づいてゆく。駆け引きをしつつ、ごぼうを取り合う。しだいにあからさまな攻防になり、決着のつかない2人、中央にごぼうを置き、ベンチに座る。

間。

『ゴボーを持ちながら』 英 衿子

女 2
女 1
女 2

しりとり。
え。
しりとりで決めよう。

間

女 1
女 2
女 1
女 2

あ、じゃあもらお（ゴボウをとる）
！（その手をつかむ）
…やっぱ欲しいんじゃない。
あなたこそ。

間

女 2
女 1
女 2
女 1
女 2
女 1
女 2
女 1
女 2
女 1

はあ。
…私だって別にい…
いらなから別に。
は？
いや、いいよ、私。どうぞ。
別に。
なんて。
…
ん？
ずるいわ…

間

女 2
女 1
女 2

私のなのに…
ん？
いいえ。

女1 ほー、ほほう。じゃあ、…あの人が好きなもの。
女2 で、しりとり？
女1 うん。
女2 …いいよ。ごぼう。
女1 う。うみ。
女2 みどり。
女1 ん？
女2 みどり。
女1 え？みどり、好きじゃないよ。
女2 好きだよ！好きって言ってたもん。
女1 嘘、青だよ好きなのは。
女2 いやいや、みどり。青も、好き、かも、だけど絶対に緑は好き。みどり。
女1 適当。…じゃあ、リンボーダンス。
女2 は？
女1 リンボーダンス。
女2 絶対嘘でしょ、見たことないよ
女1 やってたよ、こう、こうやって、
女2 やるわけないじゃん、こんな。
女1 やってました、やったもん、一緒に。
女2 一緒に？
女1 うん。ま私しか知らないだろうけど。
女2 いいかげん。
女1 リンボーダンス。
女2 す。…す。好き。
女1 は。
女2 好き。
女1 どういうことでしょう。
女2 別に何も。
女1 含みのある言い方。

女2 あほー！
女1 どあほー！

2人、口々に言い、嘆いたのちに笑い出す。

女2 あーあ。
女1 あーあ。
女2 来るかなあ。
女1 どうだろねえ。
女2 今年も。
女1 待ちぼうけ。
女2 待つしかないからね。
女1 もう、ね。
女2 この季節だったねえ。
女1 この季節だった。
女2 毎年恒例。
女1 ここで、取り合ってさ。
女2 何やってんだろう。
女1 変わらないね。
女2 私たちだけがね。
女1 何年も。
女2 何年もねえ。
女1 いい加減にしたいよ。おばあちゃんになっちゃう。
女2 おばあちゃんになったほうがさ、いいかもよ。
女1 え？
女2 待ちやすいんじゃない？
女1 えー。待つのおばあちゃんになっても。
女2 私は待つよ。おばあちゃんになっても。
女1 私も。

間

女 1 風。
女 2 風だね。

2人、少し風を感じる。
遠くにいる誰かの声に耳をすませているようである。
どちらからともなく、ゴボウに手をそえる。

女 1 置いていこうか。
女 2 置いていこう。

2人、ゴボウをもとの位置にそつと置き、立つ。

女 2 スカート。
女 1 え？
女 2 スカート。と。
女 1 あ。と……、

2人、しりとりにながら帰ってゆく。

その2
「隣のゴボウは白い」編

バス停のような場所。ベンチが置いてある。
その上に、ゴボウが2本置いてある。
黒い皮付きのゴボウと白っぽい洗いゴボウ。

女1と女2、やって来る。ゴボウを発見する。同時にお互いの存在に気づく。相手がどっちを取るのか探りながら、それぞれのゴボウを手にする。

取ってみると、相手の方が良く見える。交換。それを何度か繰り返す。遊びのようになり、2本のゴボウを交換しながらぐるぐる回ってゆく。いつしか、劇になっている。

バス亭。女2がやってくる。急いでいるよう。片手に洗いゴボウをもっている。白っぽい。時刻表を確認する。

女2 行ったかな？

女2、バスを待つべきか追うべきか迷い、落ち着かない。

女1、来る。片手にゴボウ。黒い。

女1、女2がいることを確認し、ベンチに座る。

女2、振り返ると女1が座っている。バスはまだ来ないのかと考え、横に座る。

2人、なんとなく会釈。

落ち着かない女2。

女1は落ち着いている。お菓子を出して食べ始める。

女2

(え、落ち着きすぎでは)

女2、女1をいぶかしく見る。

女1 (見られているのに気づきお菓子を差し出す)
女2 あ、いえ(いいです)
女1 (そうですか)

女1、お菓子を食べ続けている。
女2、落ち着かないのか、足を動かしアップを始める。
女1、不思議そうに眺める。

女2 15分のですか？
女1 え。
女2 待ってるの
女1 (やや考え) あ、はい
女2 ああ。

間。

女2 まだですよ？
女1 え。
女2 まだ、行ってないですよ？
女1 (やや考え) 多分。
女2 …ああ。

女2、ふたたび座る。

女1 (女2のごぼうを見て) 白い。
女2 ええ。洗って来たんで。
女1 すごーい。
女2 あ、ほら、向こう行った時すぐ、出来るように。

女1 計画的ー。

女2 まあ。

女1 わたしなんてまだこれ（自分のゴボウ）。

女2 えーいいじゃないですか。

女1 やーもうどうしよう私、こんなんで。

女2 そんなことないですって。こういうのは人それぞれ、
ペースありますから。

女1 洗おうかと思ったんですよ。でもほら、結局、また
こするじゃないですか。

女2 え。

女1 茶色くなりませんか？すぐ。表面。

女2 ええ。

女1 だから結局またこするかなーって思っで。

女2 ま、ま、そうですけど。

女1 めんどくさがりなんですよね私。ちゃんとしててす
ごいですよー。

女2 いやほんとにそんな

女1 なかなかできませんよ、そんなめんどくさいこと。

女2 私だつてめんどくさいですよ！！

女1 え？

女2 あ、いや、すいません。

間。

女2 あの、これ、もう行ったんじゃないですかね。

女1 そうですか？

女2 だってもう3分ぐらい過ぎましたよ。

女1 でも遅れることも多いですしね

女2 えー、もう、どっちよ！

女1 はい？

女2 走るか？

女1 走るんですか？

女2 走りませんか？

女1 走るのほちよつと。

女2 もしかしたら間に合うかも

女1 いやあ。

女2 だって、平気なんですか！？

女1 はい。

女2 これ、逃したら、駅に着くの遅れるんですよ。そして、特急乗れないんですよ。そして各駅で行くしかないんですよ。そして港に着くのが昼過ぎになっちゃうんですよ。そしてお昼食食べることもみんな閉まっているし、あ、まあそれはいいんだけど、今度船の時間に間に合わないんですよ。そしてもう夜の便しか残っていないから5時間待ちですよ。5時間ですよ、もう、何しろって。お昼も食べれてないし。で、夜便にのると、着くのが日付変わっちゃうし、宿も取れないから最悪待合室でござい寝ですよ。なんも食わずに。で、朝からタクシー乗って行ったってもうみんなすでに昨日から泊まってるわけだから多分だいたい出来上がっちゃって、私が今更行つたところでこれ（ゴボウ）もう、…はあ。

女1 …ああ。

女2 走りませんか！？

女1 …走りません。

女2 走らないのかあ。

女2、そう言いながら半分諦めているのか、座り込む。

女2 あー、行ったわ。これもう行ったわ完全に行ったわ

女1

女1 …。

女2 走ればよかった。すぐ。あーもう。

女1 …。

女2 あー、もう。

女1 私が話しかけちゃったから。

女2 え。

女1 すみません。

女2 …そういうことでは…。

問。

女2 黒いですね。

女1 え。(自分のゴボウ見る)

女2 いいな。

女1 ええ？

女2 まだいっぱい残ってそう。栄養。

女1 そうなんですか？

女2 ほんとはね。皮の近くがいちばん栄養価高いそうで

すよ。

女1 へー、意外。

女2 どうするんですか？

女1 どうするって？

女2 待ってるんですか、このまま

女1 (しばし考え) いきます。

女2 え!?

女1 そろそろ。(立ち上がる)

女2 行くなって、走るの!?

女1 歩きます。

女2 へ？

女1 私、駅前までなんで。

女2 …。

女1 向こうまでは、行かないんで。

女2 そうなの？

女1 行きます？ 駅まで。

女2 … 待ちます！ こうなったら、ここで待ちます！ 次を待ちます！

女1 … 行くの、駅までにしたら？

女2 嫌です、せつかく、洗ったんで。行きたいんで。向こうまで。

女1 お昼も食べられますよ。

女2 … (心が動く)

女1 では。(会釈)

女2 待って。

女2、自分のゴボウを差し出す。

女1、自分のゴボウを差し出す。

交換。始まりと同じように交換を繰り返す。

2人、それぞれのゴボウを持って別れてゆく。

自分のゴボウを手にして嬉しそうに小躍りしながら。

エピソード

ゴボウが1本置いてある。その横にラジカセ。ラジカセから、冒頭で女1が本を読んでいた声が聞こえ始める。

それについて関係があるといえればありそうで、無いといえれば無さそうな、近くも遠くもない場所に、ひとりの少年がいる。(具体的な場所は上演会場の状況などによって判断される。)

ラジカセからの声がしばらく流れている。

「待つ、ということ。」

待つ。待つ。待つ。待つ。・・・

待つのは、楽しい。

待つのは、悲しい。

待つのは、つまらない。

待つのは、面白い。

待つ。待つ。待つ。待つ。・・・

気づいたら、何かを待っていた。人は生まれると同時に、何かを待つのだ。それが「死」であるならば、生まれる前の命は、「生」を待っているわけで、それなら私も、死んだら次は「生」を待つことになるのか。ぐるぐる、ぐるぐる、死と、生とを待ち続けるのか。

私は女である。女は、命を生む。女は、命に待たれている。女は、待たなければならない。しかし女もまた命である。女には、待たなければならないときもある。

待つ。待つ。待つ。待つ。・・・

待つことは、祈ることだ。

あなたが来るのを、願うことだ。

待つことは、生きることだ。

生きることが喜びならば、私は待つのが好きなのだらう。

私は今も、待っている。

あなたと約束したあの日から、あなたに言ってもらえる日を待っている。もう、いいよ、と。君は、それでよいのだと。言ってもらえる日を待っている。

こうして日々を過ごしていれば、私は毎日とても楽しい。ふとした瞬間に、そうか、私は待っているのだ、と。きっとやって来るあなたを、待っている、そのことが私を強くする。私の毎日をきらきらとさせる。

もしもあなたが来なくても、泣くことはない。あなたを待つて過ごした日々が、私の命に光をくれたのだから。あなたは知っているだろうか。私がこんなにも、あなたを待っていることを。

あなたは、待っていますか。誰を、待っていますか。私を待つてくれていますか。

私は今も、待っている。

あなたと約束したあの日から、あなたに言ってもらえる日を待っている。もう、いいよ、と。君は、それでよいのだと。言ってもらえる日を待っている。」

女2が手紙を一通持ってやってくる。
ラジカセから音声が聞こえているのを発見。近くに寄り、その声をしばらく聴いている。音声の途中で、ラジカセをとめる。

女2 待つのは嫌いだ。私は、待つのは嫌いだ。

女2、持っている手紙を読む。

待つ、ということ。

待つ。待つ。待つ。待つ。・・・

待つのは、苦しい。

待つのは、うっとうしい。

待つのは、なさけない。

待つのは、張り合いがない。

待つ。待つ。待つ。待つ。・・・

気づいたら、誰かを待たせていた。

待つて。もう少しだけ待つてください。どうしてあなたは、私なんかを待っていたのか。もっと早くに気付かなくてはいけなかったのだ。あなたをこんなにも待たせていたなんて。だからもう少しだけ待つてください。私はまだ、何もできていない。

待つのは、嫌いなのに。待たせるのも、嫌いなのに。何もできない私のままで、私はあなたを迎えにゆくのだ。もしも時を戻せるならば、待ってください。私はまだまだ、遊んでいたい。私は何度でも生まれたい。何度でも生まれて、何度でも死んで、何度だって遊びたい。誰のことも待たせない。だから、だから待ってください。

女2が手紙を読んでいる間、女1が空の洗濯カゴを持ってやってくる。女2の隣に来て、洗濯カゴを置き、身につけた衣装を脱ぎ、カゴに入れ戻す。女1、手紙を読む女2の衣装をはずし始める。

女2、手紙を読み終え、自らも衣装を脱ぎカゴに入れ始める。

女1 私は今も、待っている。あなたと約束したあの日から、あなたに言ってもらえる日を待っている。もう、いいよ、と。君は、それでいいのだと。言ってもらえる日を待っている。

女2 私はきつと、今でも私を待っている。本当の自分になれる日を、待っている。もう、いいよ、と。君はそれでいいのだと。私が、私に、言ってくれる日を待っている。

2人、元の白い衣装に戻る。2人で洗濯カゴを持つ。

女2 行こうか。

女1 行こう。

そのとき、女2が何かに気づく。

女2 まって。なんか忘れてる！

女1 え？

2人、忘れ物を探し出す。ゴボウを発見する。

女2 あれだあー。

女1 ああー。

少年 あー。

2人、「え」と少年の方を振り向く。

少年 もう、いいよ！

音楽。

開放。

「もういいよー！」

2人、洗濯カゴにしまった衣装をまた出して、ほうりなげ、散乱させ、子供のようにひとしきりはしゃぐ。

再び出会った2人。楽しかった時間たちを思いながら、散乱した衣装の中に横たわる。

【終わり】